

No. 1443

新しい文化圏づくり

— 愛 知 —

高層ビルが林立する大都会、社会的にも、文化的にも高いレベルの生活を求めて、人々が集まってきました。一方大自然に包まれた農山村では、依然として過疎化現象が進んでいます。若者たちは皆都会へ出てしまい、村は衰退するばかりです。しかし、都市と山村、この二つの対立する地域はそれぞれ異なった魅力を持っています。

雄大な山ふところに抱かれた愛知県東加茂郡足助町。四季折々に美しい景観を見せる自然を求めて、都会から大勢の人々が押しかけています。息づまるような都会の生活を忘れるいこいの場。ふだんは忘れられた山村ではあっても、都会の人々にとってなくてはならないのが、大自然を持つ山村です。こうした事実を背景に、愛知県では、都市と山村の結合した快適な生活空間の形成をめざし、「あいち山村展」を開催しています。都市に山村のゆとりをとり入れた、新しい文化圏づくりが、今後ますます望まれることでしょう。

現代の名工

— 東 京・墨 田 —

独特の技法をこらした様式、そして鮮やかな色彩。みこしは祭の花形だ。東京墨田区向島。この町にみこし作り一筋に生きる人がいる。志布正治さん（65才）だ。志布さんがこれまで手がけたみこしは2,000台を越すという。東京、浅草神社に納められている三社みこしも3体のうち2体は志布さんの作ったものだ。志布さんはみこしの設計から、金具、彫刻の図案などすべてを自分ひとりで考える。伝統を生かしながら、かつぎやすいようにするのが一番苦労するところだという。志布さんは昭和6年、山形から上京、仏具師のところへ往み込んだ。しかし仏具師にはならず、みこし師を志し、兄弟子を中心にみこし製作に打ち込んだ。はじめは他店の作品を参考にしたり、子供の頃見た記憶をたよりに作ったという。技能の日の11月10日東京中野で行われた現代の名工の表彰式。全国で選ばれた100人の名工たちのなかに志布さんの姿もあった。受賞のあと志布さんは久しぶりに台東区の蔵前神社を訪ねた。この神社には昭和30年に納めたみこしがある。宮司の阿部さんから話を聞く志布さんはまるで我が子に再会したようにうれしそうだ。今、志布さんは自分のみこし作りの技術を少しでも伝えようと2人のお弟子さんに教えている。力強く舞い、祭の気分を盛り上げるみこし、その陰には志布さんたちのたゆまぬ努力があった。